

# 小学校での活動を行う高等学校「教育コース」 における取り組みの質的分析

## Qualitative analysis of efforts at high school "education course" which conducts activities at elementary school

キーワード：高等学校教育コース，小学校での活動，質的分析

Keywords: High school education course, activities in elementary school, qualitative analysis

三浦 和美  
Kazumi Miura

### 要 約

近年、教員の資質向上が求められており、文部科学省は学生が早期から教育現場へ出向いて活動を行うことを奨励している。早期からの職場体験により適性の判断や教員としての資質向上を目指すため、教育現場における活動を行う大学が増加している。しかし、これよりも早い段階で小学校での活動を行う高等学校がある。奈良県立平城高等学校は我が国で初めて小学校教員を目指す高校生のために「教育コース」が設置された学校であり、高校生が小学校での活動を行っている。本研究の目的は、高校生を小学校現場に送り出す目的や留意点についてインタビュー調査を行い、その取り組みを質的に分析することにある。

### Abstract

In recent years, improvement of the qualities of teachers is required, MEXT encourages students to go to the educational site from the early stage and conduct activities. The university which carries out activities in the educational field is increasing in order to aim for judgment of aptitude and qualification as teacher by early workplace experience. However, there are high schools that conduct activities in elementary schools earlier than this. Nara Prefecture Heijo High School is a school where "education course" was established for high school students who are aiming for elementary school teachers for the first time in our country, high school students are doing activities in elementary school. The purpose of this research is to conduct an interview survey on the purpose and points to pay attention to send high school students to the educational site of primary school and to analyze qualitatively the efforts.

### 1 はじめに

近年、教育現場には、いじめ不登校などの問題が山積し、教員の実践的指導力や資質向上が強く求められる現状がある。こうした社会的背景への対応として文部科学省は、将来教員を目指す学生に対して、大学入学時の早期から教育現場へ出向いて活動を行うことを奨励している<sup>(1)</sup>。早期からの職場体験は、教員としての適性の判断や教員の資質向上を図るために有効であるとされ、教育現場での活動を行う大学が増加している<sup>(2)</sup>。また、新聞によってもこうした取り組みは広く周知されるものとなっている<sup>(3)</sup>。本学において

も平成18年度から小学校で5日間活動を行う「教育実践活動」を開設し、今年で12年目を迎えている<sup>(4)</sup>。

しかし、大学入学時よりも早い段階で小学校での体験活動を行っている「教育コース」のある高等学校が報告されている(原・芦原)<sup>(5)</sup>。なかでも、奈良県立平城高等学校は、平成18年4月に将来奈良県教育を担う人材の育成を目的とした「教育コース」が全国で初めて設置された学校である<sup>(6)</sup>。一般選抜入試に先立って特色選抜入試で40名を募集し、教職を目指す生徒の意欲や職業意識を育むことを目的とした授業を行っている。平成28年度で県は「教育コース」は募集停止<sup>(7)</sup>としたが、現在は学校独自で「教育キャリアコース」を開設している。平成高等学校ホームページには、1年生「教育入門」、2年生「教育体験」、3年生「教育創造の3つの専門科目を学ぶことやこれらの科目での小学校体験、高大連携等を通して、将来、奈良県の教員として活躍するための意欲と人間的な基盤(資質能力)を高めること、特に、「コミュニケーション能力」「考え見通す力」「踏み出す力」「基礎学力」「体力」を身に付けることやボランティア活動が盛んであることが紹介されている<sup>(8)</sup>。

今後教育現場との連携により、教員を目指す学生の資質向上を図る取り組みは加速されることが予測されるが、一方で、学生の受入れに関しては多様化する児童生徒とのかかわりや個人情報の遵守など多くの課題も指摘されている。<sup>(9)</sup>

そこで、本研究では、奈良県にある県立平城高等学校を訪問し、大学よりも早い段階の高校生を小学校現場に送る出す目的や留意点について「教育コース」を担当されていた教頭先生に面接調査を行い、その取組について質的に分析することを目的とする。

## 2 方法

### 2.1 調査対象

調査対象は、奈良県立平城高等学校教頭 江藤芳彰先生である。「教育コース」で主任を務め、現在教頭先生となっている。

### 2.2 調査目的

「教育コース」を担当していた江藤芳彰先生に面接し、高校生を小学校現場に送る出す目的やその際の留意点について面接調査を行う。

### 2.3 調査方法

- ・インフォーマントに対して面接調査を行う。インフォーマントとは、面接調査を行う対象を示す。
- ・面接時には、ICレコーダーでインタビュー内容を録音、適宜メモを取る。
- ・面接終了後にトランスクリプト(文字起こし)を行い、それを基にモデル図を作成し、質的な分析を行う。

### 2.4 調査実施計画

- ① インフォーマント選定(5月)
- ② インフォーマントへの連絡・調査内諾(5月)
- ③ 面接調査依頼書・質問事項の送付(6月)
- ④ 面接調査(未定:受入れ校の指定により調整)

- ⑤ 文字起こし 面接実施後
- ⑥ 論文作成作成（分析・カテゴリー・モデル作成） 9月～11月
- ⑦ 論文の送付・内容の確認依頼（12月）

## 2.5 面接調査内容

インフォーマントに対して面接調査依頼書とともに事前に送付し、目を通してもらう。調査内容は以下の5点である。

- ① 奈良県立平城高等学校教育コースが設置された目的及び経緯を教えてください。
- ② 教育コースでは主にどのようなカリキュラムが編成されていますか。
- ③ 生徒は小学校教諭を希望してどのように学んでいますか。
- ④ 小学校での活動を行う際に学校との連携の仕方・事前指導などの留意点がございましたらお教えてください。
- ⑤ 卒業生が小学校教諭となった場合どのような点で教育コースに学んだことが生かされていると思いますか。

## 3 結果

### 3.1 面接調査結果

- ① 学校訪問日時は、平成29年7月6日（水）午後1時30分から午後3時30分であり、インタビューである筆者が奈良県にある学校を訪問して行った。
- ② 面接場所は、インフォーマント勤務先（奈良県奈良市朱雀2-11）1階会議室であった。
- ③ インフォーマントの選定と学校訪問までの経過  
インフォーマントである江藤芳彰先生は、平成26年度に奈良県立平城高等学校「教育コース」を担当され、現在同校教頭として活躍されている。奈良県立平城高等学校「教育コース」については、帝塚山大学植松利晴先生を通して情報をいただいた。  
まず、電話連絡を行い、インタビューの内諾を得てインタビューの日程調整を行った。その後調査の目的や内容について面接調査書を郵送し、承諾書を返送いただいた。質問事項についても同封し、事前に目を通してもらった。
- ④ 調査実施状況
  - ・インフォーマント選定は5月下旬に行った。
  - ・インフォーマントへの連絡・調査内諾は電話連絡にて行った。
  - ・面接調査依頼書・質問事項の送付は6月1日郵送で行った。
  - ・面接調査は7月6日（水）午後1時30分～午後2時10分で行った。
  - ・文字起こしは、訪問終了後より9月末までに行った。
  - ・論文作成作成（データ分析・カテゴリー分類・モデル図作成）は、10月初旬から11月末までの間で行った。
  - ・論文の送付・内容の確認依頼は、12月4日（月）郵送にて行った。

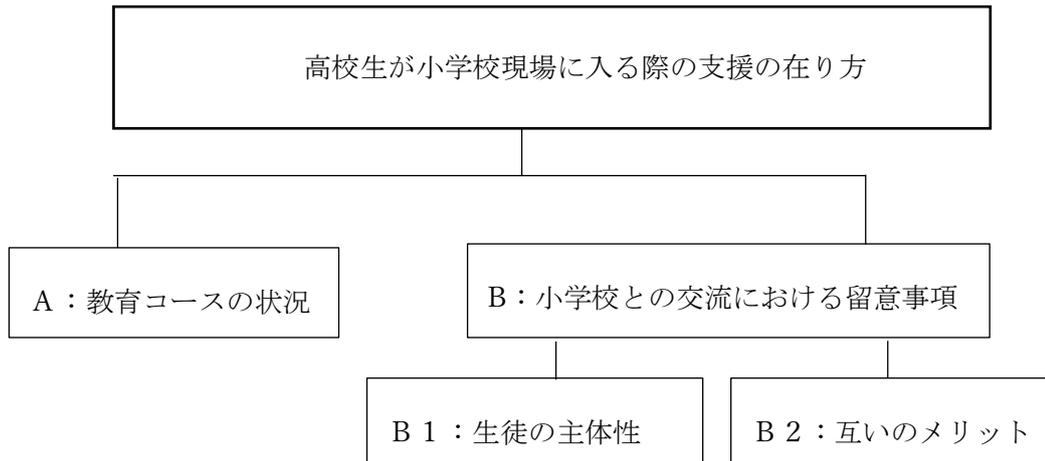
⑤ 調査内容

調査内容は、下に示す根幹的内容と具体的内容に大別された。

根幹的内容とは、今回の面接調査でポイントとなる事柄となる「高校生が小学校現場に入る際の支援の在り方」である。

具体的内容は、それを細分化する A：教育コースの状況と B：小学校との交流における留意事項の 2 点である。B の小学校との交流における留意事項は、さらに B 1：生徒の主体性と B 2：互いのメリットの 2 点に分類された。

根幹的内容



具体的内容

A：教育コースの状況

・教育コースのカリキュラムや状況はどのようになっていますか？

B 1：小学校との交流における留意事項

生徒の主体性

・生徒はどのように小学校で活動し、どのような留意点がありますか？

B 2：互いのメリット

・高等学校、小学校の互いのメリットとは何ですか？

⑥ インタビュー時の配置と録音方法

会議室の中央のテーブルでインフォーマント江藤芳彰氏とインタビュアーである筆者が図 1 に示すとおり向かい合ってすわった。テーブルに IC レコーダーを設置し、録音した。図 2 に示す写真は、同氏の承諾を得て筆者が撮影した。収録時間は 40 分 27 秒であった。

インフォーマント：江藤芳彰氏

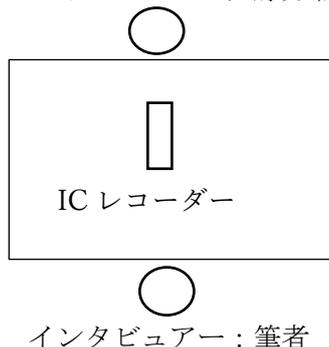


図1 インタビューの場の設定



図2 江藤芳彰氏（筆者撮影）

⑦ データ分析方法

- ・インタビューの内容をICレコーダーに記録した。面接中には適宜必要に応じてメモを取り、のちの分析の際の補助的な資料とした。
- ・インタビュー終了後、インタビューの内容をすべて文章化した。  
その後、文章化されたインタビューデータを一つ以上の概念、見解を含む意味単位に分けた。類似した内容からキーワードを探し、サブカテゴリーをより抽象度の高いカテゴリーへ統合した。
- ・最後に、その結果を基にモデル図を作成した。

⑧ 面接調査のインタビューデータ分析結果

8ページにわたるインタビューデータから平城高等学校「教育コース」の取組が「生徒の主体性」「連携」「Win-Winの関係」の3つのカテゴリーに分類されたことを表1に示す。これらは最終的に2つのカテゴリー「主体性」「連携による特色」にまとめることができた。

(1) サブカテゴリーと発話分析

表1 サブカテゴリーと発話分析

生徒の主体性	大学等との連携	Win-Winの関係
<p>○生徒が自分たちで作るんですよ。自分たちの後輩の中学生の説明会のときに、生徒が活動している様子に対して映像とキャプションと音楽を挿入して資料作成。</p> <p>○自分たちだったら(奈良県の教育課題から選</p>	<p>○奈良教育大学教職大学院とタイアップしまして、1回目はそれぞれ課題を決めておいて、大学院生が来て、大学院生とディスカッションしていくなかでその課題の内容について深く知っていくということですね。それから自分たちでいろいろ研究</p>	<p>○かなり小学校現場はアレルギーがあった、拒絶感があった。なかなか小学校思うとおりにならないし、そのところで本校の運動部の生徒がね、運動会補助、お手伝いにちょっと、とにかく入らせてくれということで前年に入ったんですね。</p>

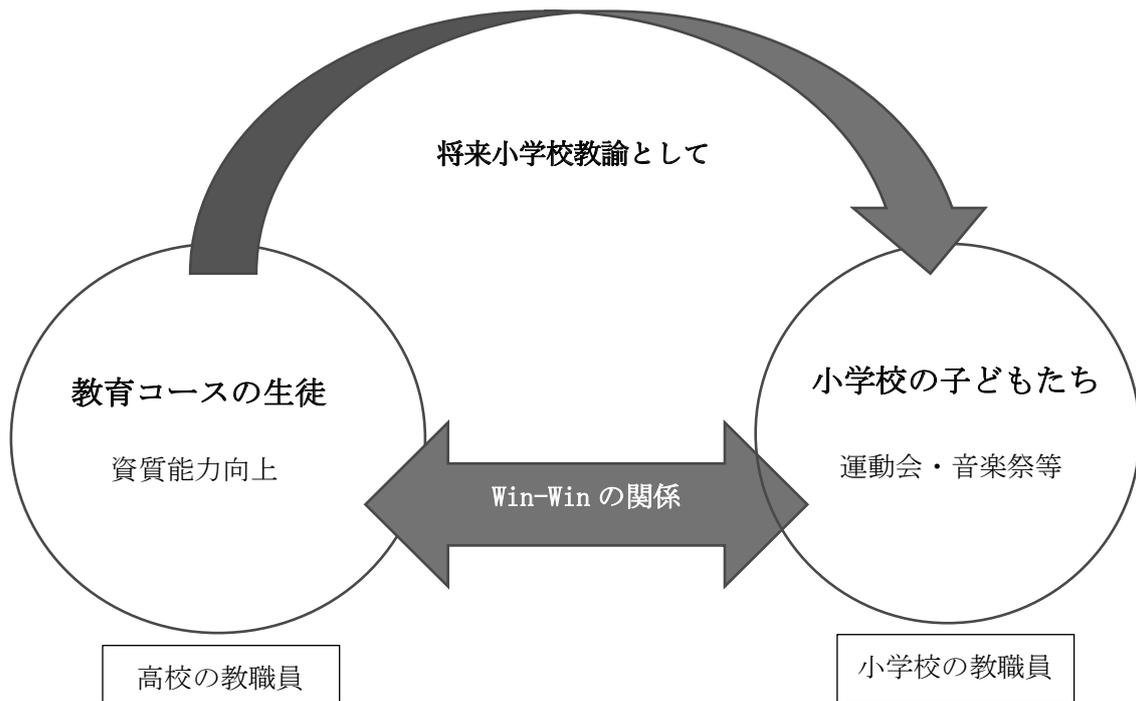
<p>んで) 例えば, 学力の向上をするためにどうやっていくかというそんなことを考えていくということですね.</p> <p>○卒業生が言うにはコミュニケーション力が高まる, そういう人間がきているから切磋琢磨できますから, 持っているものがさらによくになると.</p> <p>○子どもと接してそこで「ああ, 教師ってやっぱりやりがいがあるなあ」って入っていくのでね, そこはぶれませんよね. 大学に進学してもね.</p>	<p>したり, 課題をどう解決していったらいいかと考えたりして, 今度は奈良教育大学に行って教職大学院生の目の前で中間発表をすることです. そこでだめだしをしてもらってさらに練り上げて最終的に発表する.</p> <p>○年齢の近い人とやっていく方がまあ自分のちょっと近未来を見るという感じでね, 和気あいあいと話し合いがしていけるということで, そういう形で終わります.</p>	<p>部活動の生徒ですからすごいきびきびとね, やったんですね. それを見た小学校の先生がすごいなと. それだったら小学校に入ってもらってもだいじょうぶやというようなことで受け入れたことです.</p> <p>○今は本当に小学校さんでもうちと連携しているのを特色として打ち出している.</p> <p>○インターンシップ行って半分ということはないですけども音楽祭とかね, 今あるんですね, その準備に駆り出される. 戦力になっているということですね. さっき言いましたようにお互いに <b>Win-Win</b> でやっているということですね.</p>
--	---	--

## (2) モデル図

前項 (1) の発話分析を基にしてモデル図を作成し, 図 3 に示した.

「教育コース」の生徒が高校生の段階から小学校で子どもたちと関わることで, 将来小学校教諭となるための資質向上に役立つことが面接調査から明らかとなった. また, 小学校にとってみると, 高校生と子どもたちが触れ合うことや運動会や音楽祭の準備や片付けなども手伝ってもらえるという双方にとって有益となる「Win-Win の関係」が構築されていることが明らかとなったことを示す.

この「Win-Win の関係」が構築されるまでには多くの試行錯誤があったが, 高校生の熱心な働きの様子やきびきびとした動きが「これだったら入ってもらってもいいね」と最終的に小学校の先生方を動かすことになった. 双方にメリットがある関係を構築することがこうした活動を持続させる際に重要なポイントとなると考える.



なんとか小学校に入らせてもらいたい⇒・・・⇒これだったら入ってもいいね

図3 モデル図 (Win-Winの関係構築)

### (3) 逐語録

E: は江藤芳彰氏を示す。 In: は三浦を示す。

In: それでは、今日は平城高校の江藤先生にインタビューということでお時間を取っていただきました。今日はお忙しいなかありがとうございます。よろしくお願いいたします。

E: まず、あの、カリキュラムの方なんですけれども、これ(資料提示:表2)が「教育コース」のカリキュラムになっています。今年からちょっとコース替えをしたというか、今まででしたら教育コースの生徒というのは特色選抜という2月入試で40名を採っていたんです。で、ところが、今年からそれを募集停止ということになりました。その理由として小学校の教員の数がこれから急激に採用が減ってくるということで初期の役割は果たしたということで県の方は募集停止ということになったんです。で、学校としましては10年間続いてきたものですから、学校の特色づくりという意味からでも「教育キャリアコース」ということで改編して残していこうということで、今は1年生が「教育キャリアコース」、2・3年生が「教育コース」ということになっています。

まず、一番流れがいいのは教育コースの話なので、「教育コース」の学習についてちょっと話をさせてもらおうと思うんですけども。従来ですね、「教育コース」に関しましては、教員の技術を磨くというよりも教員の資質能力を伸ばすということで、例えばコミュニケーション力であるとか問題解決力とか想像力であるとかそういうも

のを向上させようというのがねらいでなんです。それでできるだけ多く小学校とかの現場に行って子どもたちと触れ合って、子ども理解に努めたりとか、先生方と接して職業観ですよね、それを確かにしていこうということで、カリキュラムを作成しています。1年生は2単位でこれまでやってきました。前半は「教育コース」の学習のはじめにあたって小学校訪問ということで小学校に行って、そして、その報告会をすることということでやります。それから夏休みは、野外活動実習、レクリエーションの仕方であるとかキャンプファイアーとか飯盒炊飯とか体験することですね。それから9月は運動会補助というのがありまして、運動会に行って実際に運動会の先生方の補助を試みたり、児童の管理を一緒にさせてもらったりとかそういうことをする。

今は、小学校は、先生もご承知だと思いますけれど、少子化の流れで影響が出ていて、各学年クラス1クラスとかね、そういう学校がね、このあたりも、連携校も5つあるんですけども、結局Win-Win関係ですよね。小学校にしてみたら後片付けとかして手伝ってもらうこともありますし、こっちとしてみたら現場に行って子ども理解とか先生方に学ぶことができるというそういう関係でやってきているということです。ですから、「教育コース」が募集停止になった時点で「ちょっとそれは困る」と「本校から教育コースがなくなるのは」という声も上がりましたし。

例えば、学校保健というか生活安全ですよね、熱中症であるとか傷を負ったときとかそんな、それからAEDの使い方、そんなことを学習しながら運動会の補助に行くということになります。

In: 今おっしゃったAEDの使い方とかそういうのは高校の先生が教えるということですか。

E: 実はね、大学の先生と去年タイアップして奈良教育大学の先生とやるはずだったんですけども、実は台風で休校になってしまって、それで日程調整ができなくなって、我々保健の養護教諭と我々でやったということなんですけれども。

表2 「教育キャリアコース」の学習内容(単元)について<予定>

授業	学 期	教育キャリアコース	教育コース(現行)
1年 教 育 入 門  (1)	1学期	1 開講式 2 小学校訪問 3 小学校訪問ポスター発表(New)	1 開講式 2 小学校訪問 3 小学校訪問報告会
	夏期休業中	4 野外活動実習	4 野外活動実習
	2学期	5 小学校運動会補助 6 中学校教員に学ぶ(New)	5 小学校運動会補助 6 教育ディスカッション 7 教育課題研究 (教職大学院との交流)
	3学期	7 教育ディスカッション	7 教育課題研究 (教職大学院との交流)
2年 教 育 体 験  (3)	1学期	1 開講式 2 絵本ギャラリーへ向けて	1 開講式 2 絵本ギャラリーへ向けて
	夏期休業中	3 絵本ギャラリー	3 絵本ギャラリー
	2学期	4 小学校インターンシップまたは <b>中学校 インターンシップ(New)</b> (3日間)	4 小学校インターンシップ (3日間)
	3学期	5 教育課題研究(教職大学院との交流)	5 教育研究論文
3年 教 育 創 造  (1)	1学期	1 開講式 2 教育課題研究(教職大学院との交流)	1 開講式 2 教育研究論文
	2学期	3 小論文指導等	3 小論文指導等
	3学期	4 修了式	4 修了式

江藤先生からいただいた資料を一部抜粋して提示。江藤先生のお話は「教育コース」(現行)である。

In: 本来は大学の先生に指導していただく形になるのですか。

E: そうですね。今年は自分らでやるっていうことになっていますけど。

それから秋になると「教育ディスカッション」ということでコミュニケーション力をアップするということで、特別支援であるとか、ある時は植松先生にやっていただいたときは若年層の選挙への参加率を上げるためにはどうしたよいかということ、そういうテーマにしながら話し合っていくとかコミュニケーション力をつけるということがテーマになっています。

それから、「教育課題研究」といって、これは奈良県が学校教育の指導重点ということでいろんなことを出しているんですけど、ここから6つ課題を挙げまして学習力の向上であったり、道徳教育の充実であったり、それから体力の向上であったり、

それからと特別支援教育の充実，食育の充実，学校安全の充実など6つの課題を掲げまして，だいたい3人1グループぐらいにしまして，1つのテーマに2グループが挑戦するという形でお互い同じテーマでやっていたら競い合ったりとかお互い影響を受けながらやりますんで，自分たちだったら例えば学力の向上をするためにどうやっていくかというそんなことを考えていくということですね。

これを奈良教育大学教職大学院とタイアップしまして，1回目はそれぞれ課題を決めておいて，大学院生が来て，大学院生とディスカッションしていくなかで，その課題の内容について深く知っていくということですね。それから自分たちでいろいろ研究したり，課題をどう解決していったらいいかと考えたりして，今度は奈良教育大学に行って教職大学院生の目の前で中間報告をするということです。そこでだめだしをしてもらって，さらに練り上げて最終的に発表する，そこでまた大学院生に来てもらうという感じで教職大学院とタイアップするという形でやっています。帝塚山のときでも植松さんの時も学生がやっぱりいると非常に身近な存在ですね，我々と話すよりもやっぱり年齢の近い人とやっていく方がまあ自分のちょっと近未来を見るという感じですね，和気あいあいと話し合いがしていけるということで，そういう形で終わります。

In: 今ちょっと伺っただけでも，大学の名前が奈良教育大学教育学部と帝塚山と奈良教育大学の教職大学院ということで大学との連携もかなりきちんとされているんですね。

E: そうですね。連携協定を結んでやっております。全部で6つですかね。奈良教育大学，帝塚山，それから同志社女子，京都女子大，それから畿央大学ですかね，はい。

In: それは「教育コース」が設置された当初からこういう大学の連携があったんですか。

E: そうですね。最初立ち上げる2年くらい前，準備委員会が出来まして，そこで最初入っていたのが京都女子大，奈良教育大学，それからその時は大阪教育大学も入っていたんですかね，当初は。ちょっと忘れましたね。資料を用意してもらったんですけども，そうですね。『30年誌 30年アニバーサリー』って載っている。

「教育コース」の立ち上げなんですけれども，ここで，ごめんなさいね。奈良教育大学，放送大学，京都女子大学と教育委員会と学校ですかね，というので委員会を作ってコースを発足していくかと話をして，そのあといろんな大学さん，こっちから言っていた大学もありますし，向こうから来たやつもあるということです。多くの大学は推薦をもらっていて，指定校推薦をもらっていて，教育コースに対する指定校ですね。あと指定校は関西大学，関西学院大学，立命館とかもありますし，だから比較的そういう面では優遇していただいているということです，「教育コース」に対しては。

In: それぞれの大学に入って教職を目指すっていう形ですか。

E: そうですね。だいたい75%ですね。教員になると言って卒業するという生徒が。中学校の教員になりたいという子は一般大学に行きますし，やっぱり25%の子は初

めからなる気はないけど入ってきたという。平城高校自身が人気のある学校でして、平城高校に入りたいから「教育コース」を受ける、2回チャンスあります、結果入ってくる生徒もいてましたし、入ってきてから自分には教員はどうかになって思うものもできます。だいたい75%ですね。

In: 今1番の目的と経緯とカリキュラムについて教えていただきました。

E: コピーも1年生だけでなんです。2年生からは絵本ギャラリーというのがありまして、奈良新聞社が主催してまして、子どもたちに絵本に親んでもらおうということで、そこで、大きなフロアを一つ、ブースを借りまして、そこで、劇と工作を担当していると。ずっとそれをつくってきているということですね。こどもたちのことを考えながら本番は7月の29・30日に本番を2日間にわたってやっています。それから秋は小学校インターンシップ、3日間小学校に入りまして、子どもたちと交流したり、また、先生の仕事に学んだりとやっています。それから、最後は教育研究論文という形で3年生ですけれども、そのテーマ設定をしていく。

3年生になると奈良教育大学の研究室に訪問という形で2人一組でやっているんですけれども、研究室におじゃまして教えを受けるということで、最終的には9月の29日に代表者発表会と、中間発表会もやりまして、総合評価で得点の高い6チームがここで発表するというようになっております。うちの特徴が何かと申しましたら単元になっていると、よその教育コースとか見てみたら 毎回毎回講義に来るということです、うちはしっかりと内容を広げて深めていこうということで単元制をとってまして、インターンシップで大学の先生にしっかりと事前指導と事後指導をしてもらおうということで、大学の先生にはいってもらって学習や活動がぶれないようにしていくということをこころがけてやっているということです。

In: 1年生のときに小学校に訪問しますよね、その時の学校とこのインターンシップで入る学校というのは一人のお子さんでは違うくなるのですか？

E: はい、それと運動会補助がありますから、3校重ならないように回すということしています。はい。連携5つ小学校あるんです。そこでまあ重ならないように回していく。

In: 5つ設定している、連携している学校はこの高校からどのような距離なんですか。

E: 近いところだと歩いて10分くらいですね、バス乗っていかないといけないところもありますけど、それも乗ってても30分以内ではつくということですね。時間が少ないところであれなんですけれど、「教育コース」の生徒の様子ですね。

**(DVDをパソコンで再生して見せてくださる。16 m 05s ~ 23m18s (7分13秒間))**

E: 生徒が自分たちで作るんですよ。自分たちの後輩の中学生の説明会のときに流すた

めに.

(生徒が活動している様子に対して映像とキャプションと音楽を挿入して資料作成.)

In: ありがとうございます。これはもう学生さんが作っているということですね。学生さんが作っているの素晴らしいですね。

E: ちょっと使い方を教えるとね。

In: なんか高校って感じじゃない感じですね。私も雑誌とか拝見して新しい取り組みなんだろうなと思ってきてたんですけど、もうなんかそれを上回る感じですね。

E: 凝縮していますからね。

In: 生徒さんはカリキュラムのなかでどのようにして学んでいますかとお伺いしたいのですが、在籍のコースの生徒さんが小学校の先生になろう、あるいは教育者になろうという意欲は入学後も落ちないって感じですか。

E: そうですね。落ちているということは実感したことはないですけど、まあ、教師を目指さない子もいてますからね、なかには。しかし、はっきり言って私たちが言っているのは、一般的に見たら人間力を向上させるみたいなことをやっていますんでね。ですから教員を目指さない子もそれなりにいろいろ頑張れるということです。特化していませんからね、板書の仕方とかね、そうことやっているわけではないですからね。

In: 本当に基礎力っていうかそのところを手厚くやっというらっしゃるんだなというのはすごく話をお聞きしても、さっきの映像からも分かりますね。4番目のですね、小学校の活動ということで本学でも大学1年生から出身校の小学校に1週間行って同じように活動するような講義をもっているんですけど、ほぼほぼもう9割以上受け入れていただいているんですけど、なかには「大学1年生で早すぎるんじゃないですか」ということで時にはお断りされたりということがあって。

ですから、大学1年生と高校1年生と2・3年くらいの差があって、大学生よりもっと前に小学校に入ったりする時の連携の仕方とか実践指導とかの留意点を高校生は高校生なりの留意点があるかなと思うんですけども、その辺お伺いできますか。

E: 最初やった当時、私の方でここに4年前に来て、3年間「教育コース」の主任をしてからこの仕事（教頭）になったんですけども、立ち上げの話を聞いたら、やっぱりかなり小学校現場はアレルギーがあった、そのところで本校の運動部の生徒がね、運動会補助、お手伝いにちょっと、とにかく入らせてくれということで前年に入ったんですね。

そしたら部活動の生徒ですからすごいきびきびとね、やったんですね。それを見た小学校の先生が「すごいな」と。「それだったら小学校の先生がすごいな」と「これだったら学校に入ってもらってもだいじょうぶや」というようなことで受け入れたということです。

あとは、テニス部がテニス教室みたいなやつでそういうふうに小学校に入ってやってみたら「高校生しっかりやるやないか」という話で受け入れてもらったっていう経緯があるんですね。

今は本当に小学校さんでもうちと連携しているのを特色として打ち出している。アクセントになりますね。生徒が来ることによって、うまく使っていただいたりとか。インターンシップ行って半分ということはないですけども音楽祭とかね、今あるんですね、その準備に駆り出される。戦力になっているということですね。さっき言いましたようにお互いに Win-Win でやっているということですね。

In: どちらに負担になっても続けていけないと思うんですね。

E: やっぱり小学校に入ってよかったと思うし、高校でも行けてよかった、バランスが絶妙に取れているからいいんだと思います。

In: さっきお伺いしたようにいろいろな活動には事前指導と活動と事後指導とセットという形でそういうところもすごくいいです。

E: レポートを書かせてという形になっています。最後なんですけれども、実際に卒業生が小学校の先生になったときにどのくらいですか。おとしですね、10周年迎えて、教育カンファレンスといって、畿内の「教育コース」に呼びかけまして10校くらいに来ていただいたんです。そこで発表会とかやらせてもらったんですけども、アンケート取ったんです。4期生まで出ていました。回収率が50%ぐらいで少ないな、ついで電話をして名簿からどうしているか聞いてみると約5割強の生徒がなんらかの形で現場に立っていると。もちろん採用試験、通った子もいますし、講師という子もいます。5割ですね。普通のクラスで5割教師になっているというのはないです。高い率になっているのかなと思います。

In: 5割の生徒さんはやっぱり奈良県が多いのですか。

E: 奈良県が多いですけど、大阪とかもいますね。私が来た時が1期生が出たときですけど、先輩を招いてパネルディスカッションやったんです。

In: 東北の方ではあまり「教育コース」は聞いたことがないんですね。

E: どっかね、ありましたね。青森とか。

In: そうでしたか。分かりませんでした。でも、割とこちらの方が多いと言うことですか。

E: 最初が平城高校と高田高校なんです。京都の塔南高校ができて、そういうことも近畿多いですね。おとしは結構来まして香川から来ました。愛知県から来てみたり、私立の高校が来てみたり、福岡県の県教委からも人が来たりとかね。だから地方

の方がまだ採用があるような感じですよ。都市圏に比べると。

In：そうですね。東北地方はかなりの割合で人口自体が減少しているのです。仙台市内でも私も教員でしたが、大学に移る前に辞めた学校は統廃合になってしまっ

E：ああ、そうなんですか。

In：1クラスの学校が多かったりとか千人を超える新しい団地（の学校）があったり、バランスは悪い感じなんですけれども。東北地方は人口は少なくなっているなど。採用の枠も少なくなるから実習に行った学生が校長先生に「とにかく頑張って早く教員になりなさい」って言われて、頑張っているような状態です。ある町なんですけど、5つ小学校があったのが来年1つになるんですよって聞いて。

E：ああそうですか。

In：かなりの統廃合が進んでくると思います。早いかなって感じがしますね。ただ、職業としては全くなくならないと思われま

すので、そういう意味ではこういうコースも大事だし、教員養成とか時代に合わせてやっていかななくてはいけないかなと思っています。

E：卒業生が言うにはコミュニケーション力が高まると。ただでさえ、高い人間がきているから切磋琢磨できますから、持っているものがさらによくなっていくと。入学当時はあんまりしゃべれなかったけれども、いやそうじゃないやろと人前でしゃべることが平気になってきますよね。

In：これだけがっちり活動を組んでいるとね。

E：大学の先生が来て最初一年目は私がまとめて「ありがとうございました」と御礼をして終わったんですけども、講師の先生もわたしがまとめた話なんか聞きたくないですよ。だから、「今日なんか感想言える人」って言ったらあつと手を挙げてね、言いますからね。先生もうれしいですよ。そんな感じで指名してもばつとね、その場で答えて話したりしますからね、びっくりしますね。

In：プログラムがすごい有効に効いているって感じでしょうかね。

E：そういう集団を集めているということがいい効果をね、相乗効果を重ねているっていうね。

In：あと、国の方インターンシップを制度化しようとしているようなんですけども、でもやっぱり現場に入っているということが一言でいうほど簡単でないという

か、いろいろな問題も出てくるでしょうし、(高校の)先生方の負担も大きいと思いますけれども、現場に生徒さんを入れることのメリットって感じられますか。

E: 教員養成大学に入っても、教員にならない生徒が多いってことらしいです。大学生も子どもを知らずに入ってきてみたいなどころがあるので、そこにいくとね、子どもと接してそこで「ああ、教師ってやっぱりやりがいがあるなあ」って入っていくのでね、そこはぶれませんよね。そういう意味ではね。大学に進学してもね。

In: どっちかっていうと先生になる人は、ある程度勉強ができてそれに見合った形で教育学部とか教育大学とか選ぶことが多いですね。ずっと選んでしまって、その基礎的な人間力とか、コミュニケーション能力のところはひとまず置いてみたいなどころがあって、かなり問題があるのかなって。

E: そうですね。性格が向いていないんじゃないかとかね。

In: あと、今って保護者対応とか、子どもたちも多様化していますし、すごく難しいので、単純に例えば勉強ができるからじゃあ子どもを教えられるかっていうと全くそうじゃない状況があると思うんですね。そういうなかで高校1年生、2年生から本当の子どもの生の姿を見ていくのはすごく違いますね。

E: もう、小学校訪問行っても一部の子どもたちがすわっていないんですよ。先生が周りをうろろうろしながらいなしたりしている、そういう生の姿を見てまるからね。大変やなあと思いつながら。

In: そして、こういう状況でも自分頑張ろうとかこんなふうに工夫しようみたいなそういう思考が働くんでしょうね。きっとね。

E: うん、集団になっていますからね。

In: 今日お話を伺って大学で教員養成やっていて、その中で実際にわたしたちも学生を現場に入れているんですけども、本学の場合は東北6県のいろいろなところからきていますので、私たちが直に見に行ったりとかすることがなかなかできなくて、その活動の組み方とかそういうところがもっと工夫が必要なのかなと、今日お伺いしたことなんかも参考にさせていただきたいと思います。ぜひやっていきたいなと思っております。

E: この『教職課程』という雑誌があるんですけども8月号で取材受けまして、6ページにわたってこんだけ、ちょっと漫画チックになっていますけれども、一応資料用意しましたんで、これ持って帰っていただいでください。

In: 今日は本当にお忙しいなか貴重なお話を伺いました。本当にありがとうございました。今日伺ったお話を大学の方に持ち帰って学生の指導にあたってまいりたいと思

います。

E：はい，ありがとうございました。

In：ありがとうございます。

(収録時間：40分27秒)

#### 4 考察

本研究の目的は，奈良県立平城高等学校を訪問し，高校生を小学校の教育現場に送り出す目的や留意点について面接調査を行い，その取り組みを質的に分析することであった。

まず，「教育コース」の主任を務め，現在教頭先生として活躍されている江藤芳彰先生に対して行った面接調査の結果から，高等学校の生徒が小学校での活動を行うことについては，将来小学校教員を目指す生徒にとって児童との直接のかかわりを通して教員としての資質向上，特に，コミュニケーション能力の向上を図り，「小学校教諭を目指したい」という意欲の喚起と持続につながっていることが明らかとなった。それは大学進学後にもぶれることなく継続し，高等学校在籍時の約50%という高い割合で小学校教諭となっていることから裏付けされている。高校生の時に生の子どもの姿に触れる体験がその後の進路選択や職業に直結していることが示唆された。

また，高校生を受け入れる小学校についても児童とのかかわりに高校生が入ることによる影響をもたらしている。さらに，行事の準備・後片付けといった場面での応援を高校生からもらえることから当初拒否反応もあったものの受入れに対して積極的な姿勢が形成されたことが明らかとなった。

以上のことから，高校生段階で小学校現場に入り，具体的な活動を行うことは，生徒の意欲を高め，具体的な職業観を育てることに寄与することができる有効な方策であることが示唆された。

はじめに述べたとおり，近年教員の資質向上が喫緊の課題となっていることから，今後教員を目指す学生が教育現場に入って活動を行うことがますます頻繁になっていくことが予想される。その際，今回の面接調査とそのインタビューデータの分析から明らかになったとおり，受け入れ先の学校との連携を十分に図り，双方にとって負担と感ぜない「Win-Winの関係」を築き，互いに協力し合えるなかで学生と子どもたちとのかかわりが深められるような具体的配慮が求められるだろう。こうした連携がそれぞれの学校の特色となって，児童生徒及び学生の指導へとつながっていくと考えられる。

原・芦原によれば，高等学校に「教育コース」を設置している学校は2010年時点で24校あることが報告されている<sup>(10)</sup>。今後急速な人口減少に伴い児童生徒数の減少となり，学校の特色を打ち出す傾向が強まっていくなかで「教育コース」は，一つの有効な方法として着目に値する実践であると考えられる。

一方で，小学校教諭以外の職業への関心の喚起や方策についても議論の余地がある。奈良県立平城高等学校が行っているカリキュラム編成を参考にしながら，それぞれの専門領域で活躍する方々の話を聞くことや直接現場に赴くなどの体験を教育課程のなかでどのようにマネジメントしていくかについても児童生徒の成長過程に合わせて時期や方法を吟味していく必要があるだろう。

2017年3月に発表された次期学習指導要領では，今後の社会を見通して，予測できな

い社会で生きていく力を子どもたちにつけていくことを課題として掲げている<sup>(11)</sup>。このことは、我が国における学校教育のあり方のみならず、教員養成を行っている教職課程にも対応の変化を求めるものになっていくと考える。そのため、今回面接調査で示唆された知見を活用し、教職課程における学生指導の充実を目指したい。

## 謝辞

ご校務ご多用のところ面接調査にご対応いただきました奈良県立平城高等学校教頭 江藤芳彰先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。平城高等学校が紹介された新聞・雑誌等の貴重な資料もいただき、研究の参考とさせていただきます。

また、奈良県立平城高等学校「教育コース」についてご教示いただき、平城高等学校との橋渡しをしてくださった帝塚山大学 植松利晴先生にも御礼申し上げます。

## 参考文献

- (1) 文部科学省（1997）教育職員養成審議会（教養審）答申，新たな時代に向けた教員養成の改善方策について 1. 教員に求められる資質能力  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_shokuin](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin). (2017.11.20 参照)
- (2) 文部科学省（2015）中央教育審議会 初等中等教育部会（第101回）議事録，学校インターンシップ制の導入  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/1364471.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/1364471.htm) (2017.11.20 参照)
- (3) 朝日新聞（2017.10.14）教育 教育実習、大学1年生から，31面  
大学1年生から教育実習を行い，教員の仕事を早期に体験することで，学生が教員の楽しさや自分の適性を知ることができることや大学側は教員の採用率アップにつなげて生き残りを図りたい考えがある。文部科学省は教育実習の単位に学校体験活動を盛り込めるようにする文言を、教育職員免許法の施行規則に加える予定である。  
しかし、一方で、必修化にあたっては実習を増やすと専門的な教科を学ぶ時間が減ってしまう点や、学生がセクハラなどの被害者や加害者になった時の危機管理体制が不十分な点を指摘している。
- (4) 三浦和美，渡会純一（2016）大学1年時から教育現場に入る「教育実践活動Ⅰ」の成果と課題－共起ネットワークの分析を通して－，東北福祉大学教職課程支援室 教職研究 2016，pp171 - 188
- (5) 原清治，芦原典子（2014）教育コースを持つ高等学校と大学の連携に関する研究 [archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/KO/0025/KO00250L051.pdf](http://archives.bukkyo-u.ac.jp/rp-contents/KO/0025/KO00250L051.pdf)，佛教大学教育学部論集 第25号，pp51 - 64
- (6) 渡辺研（2009）7年かけて、いい先生を育てる 奈良県立平城高校「教育コース」を訪ねて，教育ジャーナル 2009 7月号，pp8-17
- (7) 奈良新聞（2016.4.29）教育コース募集停止 教員減少見込み，1面
- (8) 奈良県立平城高等学校ホームページ，[www.e-net.nara.jp/hs/heiyo](http://www.e-net.nara.jp/hs/heiyo)（2017.6.2 参照）
- (9) 前掲書（4）
- (10) 前掲書（5）
- (11) 文部科学省（2017）学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園

教育要領の全部を改正する告示，小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について（通知）  
[www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384661.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm)（2017.6.2 参照）